

東京女子医科大学看護学会第 10 回学術集会 シンポジウム
「東京女子医科大学における看護教育と実践力の探求」

博士後期課程で得たものを臨床に生かして生きるために

宮子 あずさ（東京女子医科大学大学院）

私は看護専門学校を卒業後、1987 年から 2009 年までの 22 年間東京厚生年金病院（現東京新宿メディカルセンター）に看護師として勤務し、退職を機に東京女子医科大学大学院看護職生涯発達学分野に入学した。

修士までは大学通信教育で学び、学士は経営情報学、造形学、修士は教育学で取得した。

2009 年 3 月に長年勤務した病院を退職した際、退職しなければできないことをしたいと考え、佐藤先生の人柄と、看護師そのものを研究対象にできるという点で、看護職生涯発達学に惹かれ、博士後期課程に入学した。

2013 年に東京女子医科大学に提出した博士学位請求論文は、サルトル哲学を援用しての質的研究『看護師の実存から探る看護の本質と、それを職業として生きる意味』。この執筆過程を通じて、私は自分が何を求めて看護師という仕事をしているのかが分かったように思う。

博士後期課程での 4 年間は、答えよりも問いが大切であると学んだ 4 年間であった。自分が臨床に求めて止まぬものを言語化出来たことが、臨床への愛着を明らかに増している。

私にとって実存とは、覚悟を決めて選択することに他ならない。そして臨床とは選択の連続であり、そこには看護師の人となりが反映する。看護師は、生きてきたように看護をする。私にとって生きることと、思索すること、そして看護することは同義に近い。

私にとって学ぶことは、働き続ける支えでもあった。学んでこそ、「できる」ことを追い求める行動主義を脱し、「わかること」に重きが置けるようになった。博士号を生かす場と言えば、大学と言うのが、現状である。しかしこれから、臨床から修士、博士と探求を深め、臨床に戻る人も、増えていくのではないかと考える。

私自身のこれからの人生を通して、博士課程での探求を臨床に生かす道を、実践していきたい。

2014/10/4(土)

第10回
東京女子医科大学看護学会

シンポジウム
東京女子医科大学における看護
教育と実践力の探求


博士後期課程で得たものを
臨床に生かして生きるために

東京女子医科大学大学院看護職生涯発達学分野
非常勤講師
宮子あずさ

+ 博士後期課程修了の
あとさき

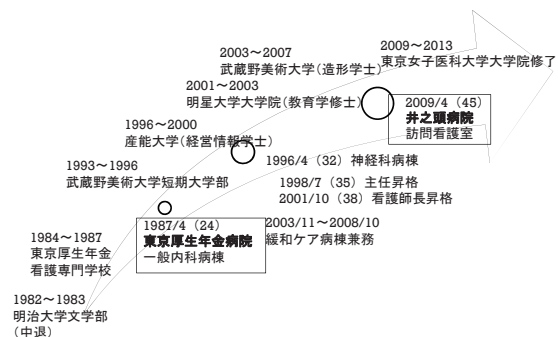
看護師28年目一現在の仕事と生活

- 臨床：公益財団法人井之頭病院 訪問看護室勤務
(非常勤：月15日程度勤務)
- 教育・研究：東京女子医科大学大学院 (看護職生涯発達学分野) と人間総合科学大学 (人間総合科学部、保健医療学部) で主に研究に取り組む同業者への学習支援を行う
(非常勤講師。ゼミへの参加、卒業研究の指導、リエゾン看護論の授業など)
- 51歳。家族は同じ年の夫 (肥満、高血圧) と猫のぐう吉
(♀13歳：慢性腎不全。在宅皮下補液開始して5年)



3

ご縁のあった職場と学校



1982～1983 明治大学文学部 (中退)

1984～1987 東京厚生年金看護専門学校

1987/4 (24) 東京厚生年金病院 一般内科病棟

1993～1996 武蔵野美術大学短期大学部

1996～2000 産能大学 (経営情報学士)

1996/4 (32) 神経科病棟

1998/7 (35) 主任昇格

2001/10 (38) 看護師長昇格

2001～2003 明星大学大学院 (教育学修士)

2003～2007 武蔵野美術大学 (造形学士)

2003/11～2008/10 緩和ケア病棟兼務

2009～2013 東京女子医科大学大学院修了

2009/4 (45) 井之頭病院 訪問看護室

4

専門領域は看護職生涯発達学分野

- 2009/4～2013/3
東京女子医科大学大学院看護学研究科博士後期課程看護職生涯発達学分野で学びました
- 2004年開設の新しい分野
師匠は東京女子医大佐藤紀子教授
- 「看護基礎教育・看護継続教育・看護管理などの枠組みを越えて、看護職者としての発達、また看護職者集団としての発達に焦点を当てた創造的な研究を通し、看護職者の可能性や課題について探求し、生涯発達する存在としての看護職に貢献する」
- 看護師そのものが研究対象となる

5

博士論文概要 (藤江あずさで出ています)

- 『看護師の実存から探る臨床看護の本質と、それを職業として生きる意味』(2013年3月)
- 研究目的：臨床で働き、病む人と関わる看護師の実存を記述し、臨床看護の本質と、それを職業として生きる意味を明らかにする
- 研究方法：20代～60代の5人の看護師への半構造的面接に基づく質的研究。生い立ち、時代背景、臨床における投機と根源的選択の3つを軸に看護師の実存を記述する
- この研究における実存とは、一言で言えば、覚悟のようなもの。5人の看護師が、自らの生き方の中で、看護師であることをどのように引き受けたかが明らかになった

6



働き続けるために学んできた

- とにかく不器用な新人時代。すべては知識と技術が不足のせいと考え、深い悩みはなし
- 3年目終わりには何とか一人前に。バブルが去り勘違い患者も減少。看護師人材確保法（1992）により働く環境も改善した。しかし、どんなに看護をしても、亡くなる患者さんは亡くなる。満足しない患者さんは文句ばかり。失意と無力感に陥る
- この時期を乗り越えたのは、大学通信教育で、幅広い分野の学習をしたおかげ。働きながらの学びは、実践に生きた。そして「できること」から「わかること」に価値が移り、看護の意味づけに深みが出たと思う

7



+ 博士後期課程で得たものを
臨床に生かして生きるために



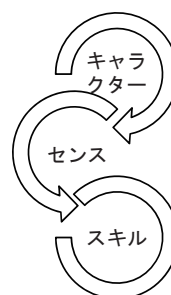
研究を通して自らの問いを知る

- 研究を通して、自分には臨床で得た2つの大きな問いがあることが明確になった
 - I. 人生はどこまでその人に責任があるか、どこまで人生は選択できるか
 - 選ぶ余地がない、あるいは望む選択肢が何もない場合も、結果として、何らかの選択がなされ、責任がついて回る
 - II. 同じケアをしても満足できる人とできない人があるのはなぜか
 - 満足はその人の中にある。それはその人の人生の反映
- 答えよりも問いが大切。答えに自信がなくとも、この問いを通して人間の本质に近づけると確信している

9



課題① 人生と看護の関連を記述



- 研究結果から、「看護師は、その人が生きてきたように看護する」のだと痛感。これは看護師として働く私の実感とも合致する
- キャラクターとセンスとスキルをキーワードに、看護師の人生と看護の関連が記述できるのではないかと
- 看護には看護師の生き方と患者の生き方が映り込む。似たように看護をしても、患者の反応が同じとは限らない

10



課題② 臨床における学びの伝導

- 主な対象は悩める中堅看護師。学ぶことで働き続けられた体験を語る、学びのエバンジェリストとなる
 - ※ エバンジェリスト＝キリスト教における伝道者のこと。転じて外資系のIT企業に多くみられる、最新のIT技術を分かりやすく説明する役職についてもこのように呼ばれる。業務の一環として、講演、執筆、セミナーを主に実施する（コトバンク）
- 論文指導から人生相談まで、機会を逃さず、研究課題や人生の問題に適した学術論文を紹介する
- 臨床に軸足を置きながら、研究にも取り組む人生を貫徹する

11



ご静聴ありがとうございました！

理解するとは変えることであり、
自己の彼方へ行くことである
Sartre, J.P.

ご質問・ご感想は…miyako@parkcity.ne.jpまで！
「ほんわか博士生活」更新中

12